

---

# フレンド

秋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フレンド

【著者名】

Z5276A

秋

【あらすじ】

わたしはぐるぐるぱーなのかもしれない

『ばつばつつかじやないの！』

怜子は怒つてもかつこいいなあ、他人事みたいにそんな見当違いな事をぼんやりと想つた、それを言ひと彼女はいやがるけど、彼女の凜々しい眉毛の角度が私は好きだ。

『今更会いたいって何を考えてんだよ？腹立つなー』

うん。ね

私はあいまいな返事をしながら、残りわずかなレモンティーをストローでする。

怜子が私に怒つてるわけじゃない事はわかつてること、なんとなくいたたまれなくなつて自然に背中が丸くなる。

奴が何を考えているかなんて分からぬ。

3年前に初めて知り合つて、2年間付き合つて、『他に好きな奴が出来たから別れたい』って言われたのが半年前、それから何も連絡なくして、『もう一回会いたい』とか言われたのが三日前。

思えばこの3年間ずっとあいつのことばかり考へてる気がするけど。あいつが何を考へてるかなんてわかつたためしがない。あいつはいつだって自分勝手で私はずっと振り回されて、それでも、それでも…

私は氷しか残つてないレモンティーをぐるぐるとかき混ぜる。

『まさか会いに行く気じやないでしょ？』

怜子が問い合わせるように私に尋ねる。

うん。

YESともNOとも取れるあいまいな答え。

YESともNOとも言えないあいまいな私の心。

『自分が何されたのか分かつてゐるの？』

わかつてないのかもしない。たぶんひどい事をされたんだらうつて事はなんとなくわかるけど。悲しいって気持ちと、それでもまだ好きだって気持ちが大きすぎて私の頭の小さな容量ではそれ以上の情報はうまく処理出来ないのかもしない。

『もし、万が一やり直して、幸せになると想ひ？』

たぶんれない。頭の悪い私でもなんとなくわかる。よくわかんないけど愛されてすらいないかもしない。でも、だけど、それでも

『あんただつてが、好きだって思い込んでるだけだよ。勘違いだよ』

だけど、もしもの想いが嘘なら、この胸の痛みが單なる勘違いな

ら、私は一体何が本当の事なのかわからなくなるよ、一体何を信じたらいいか分かんないよ。

いろんな事が頭の中に浮かんでは消える。何も言えずにただうつむいていると怜子の呆れたような溜め息が聞こえた。

『ねえ。』

怜子の声が寂しげで私は顔をあげる

『もうやめなよ』

彼女の凛々しい眉毛が情けない角度でたれさがる。

『あたしもつあんなのは嫌だよ』

以前私があいつに振られた時、ぼろぼろになつた私を助けてくれたのは怜子だった。私がこんなにも早く普通に笑えるようになつたのは怜子がずっと支えてくれたからだ。

お礼がしたいと私が言つたら

『亀みたいな奴だな』って笑われた。  
せめて鶴と言つてください。

むくれて私が訂正を求める『お礼とかはいいからさ、変な男にひつかからないで幸せになつてちょーだいよ。頼むから』そういうて子供をあやすみたいに私の頭をグリグリなしてくれた。

あの時幸せになろうつて誓つたのに、なんであたしはこうなんだろ

う、病氣のかもしない、きつとくるくるバーなんだ、あいつへの気持ちと怜子への気持ちがぶつかりあってまたも私の頭は簡単に容量オーバーしてしまつ。

泣くつもりは全然ないのに涙がポロポロとこぼれる。

『もひつ、私が悪役みたいじゃんかよー』

怜子は不満そうに言いながら、泣きじゃくる私の頭をグリグリなでてくれた。

『まだそんなに好きなの?』

私は声も出せず泣きながら小さくつなづく。

『あつたまわるいよなあー。もひつ』

諦めたようにそうこつて怜子は私を抱き締めてくれた。涙と鼻水まみれの顔が怜子の胸に押しつけられる。

あたしね、怜子みたいな男の子を好きになればよかつた。私が言ひつと『やめてくれ気持ち悪い』心底嫌そうな声で怜子が答えた。

じゃあお母さん。

『余計勘弁』

せつこつて、ギュッと抱き締めるから私の顔は怜子の柔らかな胸にお  
し包まれて、苦しくって、暖かくて、なんだか涙が止まってしま  
つた。

本当は怜子がゆづゆづ、もつと幸せになれる相手と幸せになるべきなんだと思うよ、でも私は馬鹿だからどうしてもあいつのことが忘れないんだ、どんなにひどい目にあつてもやつぱり好きでどうしようもないんだ。

「めんねとありがとつまつま回り心の中で温えてから頭をあげるとい、ほんとにこつこつじょーがないよなつて呆れた顔で。

それでも怜子は無理やり笑ってくれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5276a/>

---

フレンド

2010年10月28日04時24分発行